

# 人間関係の教育の基礎



津 守 真

ちかごろ、私は、数人の友人に、仕事の上でいちばん苦労していることは何かとたずねてみた。おどろいたことに、その人たちは、皆、職場の人間関係のことでいちばん精力を使うという答えであった。ある電気技術者が言うには、自分は専門の電気のことでは何も苦労しない。むしろ、専門の仕事に没頭できるときはいちばん幸福なときである。本来は専門以外の人間の管理のことで心身を消耗してしまうということであった。また、ある機械の技術者は、自分が実際に手をくだして仕事をするにはやさしいが、他の人たちに満足してもらって、それぞれの能力を力いっぱい発揮してもらうことは、ほんとうに、むずかしいことだと述懐しておられた。しかも、ひとつの仕事をやりとげるのには、この後者の方がはるかに重要だとのことであった。数週間前の新聞にも、ある医学部の教授が、停年で大学を退職された時の感想として、長年、学生の世話を

し、卒業後の状況をみるにつけて、学生時代の評価がいかにあてにならないかを痛感するということを書いておられた。大学を卒業するときには、成績もよくなかった学生が、社会に出てすぐれた良い仕事をしている例が多いということ、そして、社会に出るからは、多くの人に部下として仕事してもらおう能力とか、失敗にくじけないで、むしろそれを成功の機会と変えてゆく能力とかいうものが重要であることを述べて、学校教育においては、このような能力の評価は全然なされないし、またそのための教育がなされないのは片手落ちなことではないかという趣旨のことを論じておられた。知的能力については、大多数の人が、社会において要求される仕事をするにはじゅうぶんな能力をもっている。しかしそれを生かしてもらえない不満、生かすことのできない悩みが、どの職場でも大きな問題となっている。どんなに機械文明が進んでも、それを使うのは

人間であって、人間の問題を処理する能力というのは、いよいよ必要とされるであろう。

幼児期は、このように人間関係の能力の基礎ができる時代である。幼児教育においても、人間関係の教育に、もっと力をいれることが必要であろう。

次に、幼児教育において問題とすることのできるいくつかの点について断片的ながら述べてみたいと思う。

#### 他人の良いところを見つける能力

これは、おとなの人間関係において、たいせつな能力である。他人の良いところを見つけると、その人のもっている良いものを伸ばしてゆくことができる。

こういうと、ずいぶん、むずかしい能力のようにみえる。たしかに、おとなにとっても、かならずしも易しいことではない。しかし、幼児の生活の中にも、その具体的な場面を見出すことができるのである。

三才になる子どもが、ひとりでせっせと遊んでいたが、やがて、本やままご道具をひとかかえ持って、歩いていった。そこに別の子どもがきて、本をとってしまった。その子は、「カエシター」と泣きそうになった。しばらく、ふたりは向かい合って、互いに見ていたが、相手の子は本を返したのである。すると、その子は、「シンセツネー」と言っ、にこにこしてまた歩いていった。

まだ年令の幼い子どもの小さな例であるが、自分がとられたので

あるにもかかわらず、返してくれたところだけを見ている。おそらく、親切などということばの内容は理解していないだろうが、それが、相手に対して良いことばだという、ことばの感じはわかっているかと思ふ。だから、この年令から、まわりのおとなが、とってはだめですよというだけではなくて、その一連の行為の中に、良いところをみつめてほめてやるが必要なのである。

相手の悪いところを指摘して非難するということは、子どもにしばしば見られることであるが、おとながそれに同調しない方がよいと思う。「センセー、誰サンハコンナコトヲシタンデスヨー」と訴えてくることが多い場合には、クラスの先生はよく子どもの生活を注意して見ないかと思ふ。たとえそれが事実だとしても、お互いの悪いところをみつめて訴えあうという空気は、もっと相互理解の方向へと変えてゆく工夫が必要である。

ことに、集団で他人を非難する側になると、批判者の側はすべて正しく、非難される側はすべて悪くなってしまつて、真実から遠ざかってしまう。ひとたび非難する側に立てば、その人は無傷で済んでしまい、非難されるものは立つ瀬がなくなるといふのであっては、まったく教育的でないことになる。幼稚園のクラスではむしろ、良いところを見出し合う雰囲気としたいものである。

かんたんに、ありがとうということ

他人が何かしてくれたとき、それが物をとってくれたとかいうような小さなことでも、ありがとうという、その好意が相手に伝わ

るものである。子どもでも、ありがとうと言って受けとってくれるのと、フンと言って受けとってくれるのでは、違った感じがするものであろう。ものをとってくれたり、渡してくれたら、それだけのことでありがとうなどというのは、ことばだけの問題で精神が伴わないという議論があるかもしれないが、それはきくものにとつては快く、全体の空気をなごやかにするのに役立つことは事実である。子どもがかんたんにありがとうと言えるためには、まず、おとなが子どもからもを受けとったり、してもらったりしたときに、ありがとうと言うことが必要なのであって、ほとんどそれだけで十分だと言つてよい。これは、何げない日常の生活のやりとりであるから、わざわざ機会を設けて訓練するというような性質のものではない。そうやって訓練されると、かえって、ぎこちなく不自然なあいさつに終つてしまふ。

#### かんたんに怒らないこと

幼稚園のある組に、他の子どもたちから、大へん好かれる男の子がいた。その子は、とりたててすぐれているでもないし、また人を統率する力があるのでもない。しかし、何となしに皆の人望を集めているのである。ある時、この子をふくんで、数人で砂場で遊んでいるところを観察する機会があった。この子どもが砂場にはいつてきたときには、すでに数人の子どもたちが、山を作り、トンネルを掘り、線路を縦横につけて、水を流して活発に遊んでいた。その子は、自分もやろうとして穴を掘りはじめたところ、別の子が「ア、

ソコハ車庫ダカラ掘ッチャイケナイダヨ」と叫んだ。その子はだまって、別のところに砂を盛ろうとした。するとまた別の子が「ソコハキリカエ線ダカラサワラナイデ」と言われてしまった。どこでもそう言われ、しまいに「チエ、ダメダナア、——チャンハ」と言われるしまつてあった。ところが、その子はそれをいっこうに苦にしないで、にこにこして、あいたところをみつめてやりはじめ、しばらく後には、この仲間まじつて、活発にあそんでいたのである。

たいがいの子どもだと、そのくらいみんなから言われると、怒つてけんかになるか、あるいはつまらなくなつてその場を去るのがふつうであらう。後に担任の先生にきくと、「この子はいつもこうなんですよ。だから人望があるんですよ」という話であつた。

おとなでも、ほんとうは良い人なのに、すぐ怒つてしまう人があつた。それは不必要に人間関係をこわし、他人をも不愉快にし、自分もいやな思ひをするであらう。どうしたら、怒らない子どもになるのか。それは、周囲のおとなが、忍耐よく、理解のある眼でその子どもを見守ることが必要であらう。そのとき、いつも怒りっぱく、いろいろしやすい子どもも、次第になごやかな気持になつてくるであらう。

#### 他人を信頼する能力

他人をみると、競争相手としか見ることのできない人がある。おそらく、兄弟関係などでも、比較されることが多く、競争心をかき

立てられることも多かったのであろう。競争そのものはけっしてわるいことではなく、むしろ仕事をするのに必要な要素でもある。しかし、他人を競争相手としか見られない場合には、いつも他人を低く見、自分が人よりも上に立とうとする。劣等感と優越感にとりつかれてしまう。それでは他人といっしょに仕事をしてゆくことができない。

他人に対しては信頼感をもって接し、お互いに相手のまごころを信用することができるということは、人間関係をつくるのに重要である。その信頼感は、この人はどんなことがあっても自分を信用してくれているという、最後のよりどころをもっていることから生れる。家庭においては、親がその役を果たし、幼稚園や学校では教師がその役を果たす。その立場にある人が、子ども同志を比較し、子どもを心から信用してやらないならば、子ども人間に対する信頼感は破れてゆくのである。

#### 不合理なことを経験すること

子どもの世界は、いつも正しいものが勝ち、合理的なものが通るとはかぎらない。おとなが傍に居る場面では、比較的合理的な筋道が通りやすいが、幼稚園の生活では、先生の目につかないところで、不合理なことが勝利を占める体験も少なくない。

先日、部屋の片隅で観察したときのことである。クニスでも力の強い男の子と、もうひとりの男の子と口争いになった。その子が、「ケネディ大統領ハ死シタモン」と言うと、力の強い子が、「ケネデ

ィハ死ナナイモン」と言う。死んだ、死なないで言い争ううちに、力の強い方が子が、「ソレジャ、ホカノヒトニキイテミヨウカ」ととんでいって、ゆき当った子どもに、「ケネディ大統領ハ死ナナイヨ、ネ」とたずねた。その子は、あまり事情のみこめなくて、うなずいてみせると、「ホラミロ、ケネディハ死ナナイモンネ」と言う。もうひとりの男の子は、いかにも不服そうに、しかし言いかえすことができなくて、すみのいすに腰かけて、涙ぐんでいた。が、じきに気げんが直って、遊びにとんでいった。

おとなの世界では、自分がどうしても不合理だと思っても、それをがまんしなければならぬことが数多くある。子どもの世界もまた然りである。正しいと思えば、どこまでも貫き通すことも重要であるとともに、日常のささいなことでは、不合理なことをもがまんする体験もまた必要なのである。

人間関係の教育としては、まだもっとつけ加えてゆくことができるであろう。そして、幼児の生活をみると、人間関係を学ぶのにきわめてよい機会がたくさん見出される。そのような機会は、意図的な場面や話し合いにはなかなか出でこないものであって、それは、人と人との偶然的なふれ合いの中にあられるのである。幼児に遊びが重要だというひとつの理由は、それはこのような人間関係を学ぶのにもっともよい場面だからである。幼児期の重要な問題として考えたい問題である。